

文(「文芸はどのように受け取られているか」)まで、それぞれが個性的な方法論を用いている。

そうした多様性をふまえつつも、本書を貫くものは実証性であろう。主観の世界を客観的にとらえるのは困難な仕事で、客観を大事にしすぎると文芸の味わいが失われる。かといって、文芸におぼれこむと科学性が希薄になる。そうしたバランスの上に文芸の教育社会学が成り立っているので、本書にもそうした苦心がかいま見られるが、それぞれの方法で実証を試みている点を高く評価したい。

こうした内容の構成だけに、どの論文も興味深いのが、誰しもが持つ「思い出の歌」を取り上げ、そうした歌との出会いが誰とどういう場でどんなきっかけで作られたかを考察した「出会いとしての音楽」(野村幸治・山田浩之・藤墳智一)を読むと文芸の社会学を身近なものとして感じることができる。また、マンガを書く高校生のマンガ部員の分析を試みた藤田由美子論文(「マンガをかく高校生」)なども納得しながら読むことができた。

ふだん接する機会の少ない領域だけに全体を興味深く読めた。こうした未開拓の分野を切り開き、一定レベルの研究水準に達することができた片岡教授を中心とした執筆者に敬意を表したいと思う。また、編著の場合、玉石混合の論文の寄せ集めになりやすいが、本著は同窓の執筆者だけに問題意識が共有されており、協同作業が成功した数少ない事例に属そう。

ただ、正直にいうと論文の多くはそれなりに興味深いものの、奥行きとか濃くという面での充足感を味わいにくく、研究途上の良い意味での「意欲的な習作」という印象を受けた。評者としては、折角、新しい研究領域が開けたのであるから、執筆者の大学院生の中から片岡氏の研究を受け継ぎ、文芸の教育社会学の可能性を追求して、完成させる人材が登場して欲しいと思った。

浜田寿美男 著
『発達心理学再考のための序説』

ミネルヴァ書房、1993年

無藤 隆 (お茶の水女子大学)

浜田氏はワロンの再解釈で最も知られているかもしれないが、どうじに、発達心理学の理論発達論的な枠組みへの批判も極めて透徹したものである。本書は、『雑誌』に連載していたその批判的検討を一冊にまとめたものである。

第4章「意味を読み解くということ」において、卒業論文の段階で既に心理学の枠組みへの疑問を抱いていたと語っている。「今日の心理学諸研究の背後にある人間観が、どうも氣にくわない」(p.207)という。「膨大な量の研究論文が膨大な数の問いかけから始まったはずであるにもかかわらず、なにゆえそういう問いを立てるにいたったかと、一つ一つ問いただしてみると、その問いが結局のところ、大学・研究機関のなかで閉じた実験文化にしか根ざしていないことが多い。某という研究者がこれこれの実験を行って注目されたという学会情報が流れれば、他の多くの研究者がとびついて、類似の実験がいくつも積み上げられます。しかし、それもやがてデッドロックに乗り上げてしまうと、次第に忘れ去られ、次の流行に

乗り移っていく。そこでの問いの意味は、研究文化、実験文化の土俵のうえではかられ、研究そのもの、実験そのものの意味が問われることはありません。『問いの根拠』を問うことは野暮なことであり、時にはタブーでさえあるのです。」(pp.209-210)

それが科学だよという反論が聞こえそうだ。確かに科学はその枠組みの根底をいちいち疑うことなく、データを積み重ね、理論を手直ししていけばよいのかもしれない。だが、心理学、特に発達心理学はそのような意味での科学として安住できるだろうか。人が生きるという主体のあり方や意味を考慮しなければならない問題がそこに多くあるとしたら、その種の問題は研究する主体の側の問いかけ、さらに、研究される側の主体としての問いかけを無視しては進められないだろう。

では、どうしたらよいのだろうか。本書でそのための簡単・明快な答を出しているのではない。発達の心理学の持つ理論的な構図自体を再検討しなければ先に行くことは困難であるからだ。その構図の再検討は次のようであるという。(p.59)

- ・ 個体を単位として切り出す視点に対して、類（ないし共同体）の視点
- ・ 第三者的な時計的時間に対して、人がその只中を生きる時間性
- ・ 変化に対して、その根元にある不変項
- ・ 構造的な変化への着目に対して、その構造を具体的に肉づけする生活（そこには多分に偶発性・一時性がつきまとう）への着目
- ・ 完態へと進む方向性の視点に対して、むしろその出発点たる零からの視点。

私たちの生は常にこの両面を持っているのだが、現在の科学的発達心理学は前者の視点のみを抱いてきた。主体を組み込んでの人の生の検討はその両面に対する目配りを必要とするのである。

具体的に、その検討とは、人々の織りなす「物語」の記述を行うことだという。物語とは、「複数の人々が織りなす意味の脈絡」(p.155)であり、個々の人々は、その既に織りなされている物語の舞台に登場し、新たな物語を加えていくのである。「人間がその時間性の中で織りあげていく心的現象の世界」(p.251)であるこの物語の記述と、その物語が親やその他の人々のそれといかにして相互浸透しているかを、その構図の検討を含めて、分析し、記述していくこと、それが発達の研究としてここで提示されていることである。

しかし、その作業は決して容易なことではない。既に、学問のみならず日常の意識そのものが制度化された商品化され、当たり前な生活スタイルになっているからである。必要なことは、「私たち自身の〈ここのいま〉を再度みつめ直す作業から」(p.303) 始めることなのである。そこから、「人がその能力でもってどういう生活世界を作り上げていくのかという歴史性、文化性の問題」(p.304)を解明しなくてはならない。だから、「六手勝流であれなんであれ、ともかく現象のある側に向いて、生の現場の人間を読み解こうと試み」(p.305-306)ようと、著者は呼びかける。

現在の発達心理学にコミットしている人も、批判的な人も、共に本書を丁寧に読むことで得るものは多いに違いない。著者の分析に全面的に賛成しようとしまいと、研究の枠組みの根底部に届いた分析だからであり、その枠組みの再考を志す人の出発点となるものだからである。